

# 山のたより

22号 平成7年5月臨時号

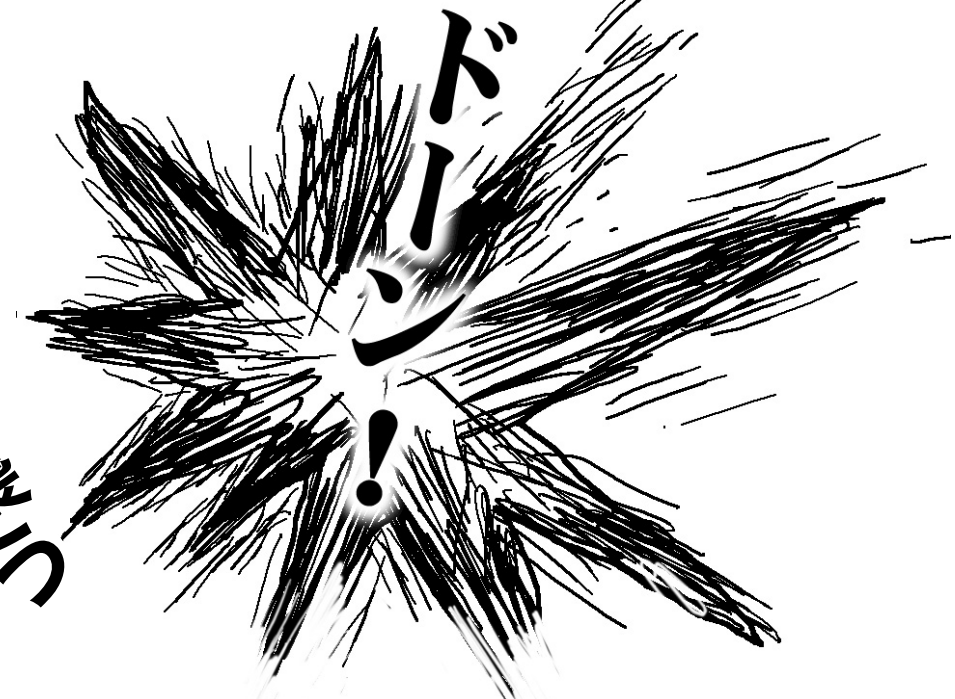
編集／発行

〒652  
神戸市兵庫区氷室町 1-5-11  
行守寺 きょうしん  
tel (078)511-9691 fax 531-6335

避難所発信



1995.1.17.AM5:46



## 心凍りつく大揺れ 一瞬「死ぬかも……」

ドーンという轟音とともに、寝ていた体が激しく突き上げられた。  
「キャーッ！」  
同時に、横で寝ていた女房は悲鳴をあげ、反射的にしがみついていた。続いて激しい横揺れ。  
咄嗟に「こりゃ家の中にいたら押しつぶされるぞ」と頭の中をよぎった。  
今にして思えば、とても立って歩けるような程度の揺れではなかったたので、前後左右の壁にぶつかりながら部屋を出たものと思う。  
ものすごい力で私にしがみついている女房にどなった。  
「外に出え！子供を起こせッ！」  
「おーいッ、みんな大丈夫か？」  
必死になって、親子無事に二階を駆け下りた。

未眠を襲った

# 恐怖の一撃

じ所に懐中電灯を掛けていることだった。手探りだったが、すばやく懐中電灯を取り、一階の奥で寝ているおばあちゃんの部屋に行くと、見るも無残にあらゆる物が散乱している。テレビも、よく頭を直撃しなかったものだと思うほどすぐそばにころがっている。  
タンスが倒れて、おばあちゃんの寝ている布団の上にのしかかり脱け出せないでいる。

息子と二人でタンスを起こし、おばあちゃんを引っぱり出すとみんなで玄関めざして一目散に走った。  
なんとか危機を脱出できたようだ。  
陽も高く昇るにつれ、カーラジオから刻々流れる被害状況は激しさを増すばかりで、パニックの様相を呈していたが、軽い余震は続いていったものの、大きな揺れは一段落したようだ。

二人の娘に外に出るように命じたが、離れるのが怖くて出ようとしなない。一刻も早く家の外に出なければならぬが、まだおばあちゃんがいる。  
この時いちばん役に立ったのは、いつも同



# ありがとう



## ■頭がさがった

「清水さん、何が欲しい？何でも言うて、持つて行くから」  
「持つて行くつて、神戸には来られへんで。どこもここも家が倒れて道をふさいどるからな」  
大変寒い日だったが、もう日が暮れるころ脇



田さんがやつて来た。50〇〇のバイクに積んだ大きな箱には救援物資が満載されている。かなりの重量でほとんど走行バランスがとれない状態。普段からあまり丈夫な方ではないと言ってい

るのに。  
「えーっ？あんな遠い所から。しかもバイクで……」  
ビックリしてお礼言うのも忘れていた。  
「おう、山越えて来て、三時間かかったわ」とホッと一息ついたのも束の間、救援物資を全部おろすと、  
「もう暗くなつたから帰るわな。また時間かかるし」とトンボ返り。  
全く恐れ入った。  
耐寒装備はしているものの、これからまた三

時間、冷たい夜風を瘦せた軀に、ともに受けなければならぬ。大阪の東のはずれ、京都との境あたりにある自坊めざして走り出した彼の後ろ姿を見送った。  
「あなたのお友だちつて、みんなよくしてくれはる人ばっかしやね」  
「そやなあ、オレにあんなことできるやろか」

## ■エリマキトカゲ

朝五時半ころだったと思う。こんな時間に鳴るベルに、だれか亡くなったかと思ひながら受話器を取ると、福島（大阪の福島ではない）の野津で、すぐ近くから電話していると言う。エッ？と聞き返すと鳥原水源地の公園にある電話ボックスからだ。

「なんやそんな所から電話してきて、早う来いや」

電話を切つて、一、二分しかたないうちに、異様な風貌をした訪問者におどろいたのか、二匹の犬がけたたましく吠えだした。見るとガタガタふるえながら野津が立っている。因みにふるえているのは、体が冷えているせいであつて、おそろしくてふるえているのは犬の方である。

女房があわてて作った熱いコーヒーで冷えきつた体を暖めながら  
「夜中の三時に着いちゃつてさ……」と話す彼

の声は、まだふるえている。  
聞いてみれば、電車で来れる所まで来てその後歩いたりトラックに乗せてもらったりしてやっと兵庫区までたどり着いたのが朝の三時だ。途中、とにかく寒くて暖かい缶コーヒーでもときがしたが、自動販売機が全部壊れていた。こんな時間に教信のところへは行けないし、ちよつと仮眠



をと、通りかかった兵庫区役所に行き、「決して怪しいもんじゃござんせん、ちよつと軒下三寸借り受けとうござんす」と、中に入ると避難民でいっぱい。暖房のきいていない廊下の片隅でふるえながら夜が明けるのを待った。朝五時になると避難している人たちが起き出して、えたいの知れないよそ者が落ちついて寝ていられる訳がない。ゆつくり歩いたがすぐに公園に着いてしまった。時間かせぎに体を動かしたくらいで体が暖まるはずがない。おまけに、のどが渴いたので水道の水をガブ飲みした、と、まだふるえている。コタツでゆつくり体を暖めているうちに陽も昇り、朝ごはんを食べると本来の鉄人になつて力もあり。

「おう、何かすることないか？」  
車庫の入口をふさいだだけの仮住居は雨の日

## ありがたさを痛感 全国から あの人この人

「全国から支援の手ばさしのべてくれらすでしよが、たいて嬉しかですもんね」  
奥尻島もさることながら、雲仙・普賢岳災害で遺体安置所となり、災害後ボランティア活動を続けている島原護国寺の岩永泰賢師。  
「神戸は大変でしょう、どんなことにでも使ってください」とワゴン車を一台置いていった。  
実に全国の皆さんから見知らぬ方にまでお見舞い支援を戴いた。本当に岩永さんの言うとおり「たいて嬉しか」の一言に尽きるが、胸に抱く感謝の気持ち、文字に書いたり、言葉で表現することによって、かえって漂白されそう、正に筆舌に尽くしがたい気持ちである。  
宗務院、身延山を始め、全国のご寺院。檀信徒の皆さん。友人知己。兄弟親戚。縁あるすべての方々からいろんな面で助けて戴いた。  
あの人この人も……。載せたいことが山ほどあるが、誌面に限りがあるのが残念。





本領発揮といったところか。

「遠くから来てくれたのにコキ使って、ご苦労やったな。助かったわ。久しぶりや、避難所で一杯いこか」

屋ごはん食べながら一杯どころか、二人でかなり飲んだ。顔じゅう伸ばした長いヒゲを両手でつかんで両ワキに引っぱり、

「エリマキトカゲーッ！」

突然のパフォーマンスに教子と章子は目を丸くしてビックリ仰天。間を置いて笑いころげた。帰ったあと、

「お父さん、あのエリマキトカゲのおっちゃん何してる人？お父さんの友達ってさあ、おもしろい人ばかりやなあ」

「ん？あいつなあ、大きな寺の住職でなあ、えらい人なんやでえ」

「うっそお！」

### ■漬け物くれ

受話器を取るといきなり、「おうワシや、元気しとるんか？」とくる。

いつものことながら、何の飾り気もなくぶつきらぼうに電話してくるのが、またいい。

「何か欲しいもんがあつたら言うてみい」というから、

「おまえのお母さんが漬けた漬け物、たのむわ」と言ったら、ドッサリ持ってきた。

かなり以前のことだが、井上の家に泊まった

ときに食べた漬け物のが旨くてうまくて、ついに口に出てしまった。

### ■おやじの教育

「私はこういう者です」と名刺を出した。全く見知らぬ山梨県の住職さん。後ろには、小学五、六年生くらいだろうか、一緒に付いてきている。二人とも大きなリュックを背負い、登山靴をはいている。

「お困りでしょうから、少しでもお役に立てれば……」

リュックに一杯詰め込んだ救援物資を全部おいていてくれた。

全く見知らぬ方の、しかも遠来のお見舞いに恐縮したが、同時に自分だったらどんな行動をとるだろうかと考えさせられた。

「あ、この子ですか？学校は休ませました。こんないい勉強の機会はないですからね」



### ■ゆるくない

突然お電話しまして申し訳ありません、と言う女性の声。

「神戸はゆるくないですね」

と聞いて咄嗟に、北海道からか……、と頭の中で思い巡らしてみたが、北海道に知り合いの女性はいいない。

「函館の和合寺の檀家の者です。ご住職に話を聞きましてこうしてお電話を……」

その二、三日後、北海道の美しい海の幸がドーンと届けられた。酒の肴に最高だった。

何年も合っていないが、大学時代四年間一緒にやったこの寺の住職・土子（ツチコ）と読む、ドシでもよい、ドコもしくはツチノコと読んではいけない）も心配してくれていたんやなあ。

■ボランティアグループの活躍  
マイクロバスを改造したキャンピングカーでやって来た。

「何でもします」という代表の蓮見さんの申し出に、「本堂の大事なものを運び出したいんですが、収納するところがなくて……」

さつそく方々に電話であたっていたが、大震災直後の需要急増でなかなか確保



が困難な様子、「やっとみつかりました」と、遠方まで取りに行つて、倉庫がわりの金属ポール製のカーポートの組立て作業が始まっ

た。組立だけならさして問題ないが、本堂のヤブに建てると、お願いしたものだから、開墾から始めなければならぬ。夜は新開地で炊き出しの予定ときいているが、

どうやら大変な事をお願いしてしまつたようだとし反省。そして二週間くらい後だっただろうか、メンバーが少し入れ替わり、第二次派遣隊がやって来た。今度は衛生局作業員になってもらった。震災で壊れ山



水を得た魚？

# サバイバルの日々

■髪洗いたいッ、

風呂入りたいッ

「おフロとまでは言わへんけど、せめて髪だけでも洗いたいね、教子」



のように出た荒ゴミ、震災前から二ヶ月ほど溜まっていた日常生活の荒ゴミ。ゴミ集積場所にトラックで何往復してもらったことか。それに私は出かけていてほとんど家にいず、ロクにお礼も申し上げていない。ほんとに申し訳ない思いですが、大助かりでした。

## ■Aクラス

震災直後、これからは当分ここで寝泊まりせなあかな、とコンクリートのガレージにゴザを敷いてその上に電気カーペット。毛布や

布団をかぶつたら、とりあえずは横になれる。体育館に避難している人達に較べたらこれでもまだマシや、下の中くらいかな。

「清水さん、これやったら朝晩は冷えて寝られへんで」

様子を見に来てくれた町内の人達が、コンパネ持ってきて敷いたるわ、断熱材持ってきたるわ、と親切にしてくれて、またたくまに快適な住環境ができて上がり、これで下の上くらいの生活ができたなと思っていたら、仏壇屋の武士さんが来て、「ここはAクラスの避難所でっせ」とタイコ判を



押した。それにしてもわずか八畳くらいのスペースに置いたコタツに家族六人が足をつつ込んで寝るのも一ヶ月が限界。ストレスが溜まっているところへ宗務院から支給されたプレハブの仮設住宅が届いた。日蓮宗寺院緊急救済の陣頭指揮を執っている篠原事務局長は、需要が激増しているプレハブ住宅などとても現地調達どころではない、と長時間かけて、職人と一緒にトラックでやって来た。トラックのヘッドライトを頼りに、夜遅くまで職人と一緒になって土木作業をしていた事務局長。頼もしい姿に、地獄に仏とはこのことか、と。

「あの職人さん、こんな時間までよう働いてはるね」「アホッ、あの人は宗務院の偉い人やぞ。お寺さんやで」

神様、仏様、篠原様。そして今、このプレハブ住宅は、遊びに来た高校生の息子の友達に「第七サテイアン」と呼ばれている。

「頭ぐらい洗ったらエエがな、オレが洗わしたる」  
「シャワーあらへんのにどうやって洗うのよ、な、お母さん」

「お前らシャワーで髪洗うんか？お湯で洗うんやろ。枯れ枝集めてこい、ヤカンでお湯沸かしたるから。水混ぜてひしゃくで頭からかけたるがな」

「洗面所もお風呂場もないのに、どこで洗うのよ」

「外に決まっとる」

「エーッ？外でえ？」

外はもうすでに暗くなっている。延長コードをいくつも繋いで枝にひっかけて裸電球に、葉が一枚もないもみじの木が寒々と浮かび出されている。両足を大きく開いて頭を下げ、長い髪を洗い出した。「はい、かけて」「ストップ」と教子の指示どおりにバケツからお湯をくんで頭にかける。シャンプーからリンスまで長い時間を曲げているので、しきりに腰が痛いと言う。頭を下げたまま「お父さん、タオル取って」もみじの枝にひっかけていたタオルを教子に手渡すと、やっと腰を上げた。髪を拭きながら、「あー最高や。めっちゃ気持ちいいわ」

「教子、あんた実験台になって、お父さんにお湯かけてもろて髪洗いなさい。成功したら

お母さんも、アッチちゃんも洗うわ」と言っ、この耐寒露天夜間洗髪実験を終始見守っていた女房は「エッ、ほんま？アッチちゃん、私たちも髪洗おうか。お父さん、お願いッ」  
「孝彦、みんな髪洗うねんで、お湯沸かせや」気がついてみると、煙ばかりでなかなか火がつかない。難儀しているようだ。スイツチひとつで火が着く生活しか知らない息子には、どうしたら太い木に火がつくかわからな





いようだ。

「新聞紙からいきなり太い木に火が着くわけないやろ、ちゃんと見とけ」

新聞紙、小枝、中くらいの枝、太い木と順を追って勢いよく萌えだした。

翌朝から自分でお湯を湧かしている。「お父さん、お湯かけてくれ」と自分も髪を洗い、オシャレを楽しんでいる。

二、三週間ぐらいたって、余震におのきながら、がまんならず義妹の家に風呂に入りに行った。次の週もまた行つたが、大渋滞で車が動かない。いつまでもこんな事は続けられない、ならば風呂を造つてしまおう。安慶ちゃんが本堂の廃材で造つたたきもん小屋を改造して風呂小屋にしよう。土を少し掘り下げコンクリートでカマドを造りドラム缶を置いた。本堂の玄関で使っていたスノコを並べて洗い場を造つた。完璧な清水湯のでき上がり。少々時間はかかったものの沸いた。「一番湯はやっぱりお父さんに入ってもらわな、バチが当たる」とは言うものの、その実人体実験。みんなめずらしさに替わるがわるのぞきに来る。「お父さん、どう？」と言うか言



わないうちに、「わあ、けむたいッ」と、逃げていく。マキの燃え残りが少しでもあつたらけむたくて、目が開けられないし、息ができない。次の日、煙突をつけてリニューアルオーブン。「ほんま？お父さん。絶対煙たない？」少しはけむたかったようだが、なんとか入れたようだ。

「どうや、気持ちよかつたやろ」

「うん、気持ちよかつたけどな、むっちゃ赤いやん。サビでまつかつたやでえ」

「鉄分は体にいいねんで、お前ら偏食ばっかりしとるから鉄分の補給にちょうどいい」

### ■神戸ブランド

国際都市“K O B E”というだけに、そのファッションセンスは羨望のまなざしで見つめられていたが、大震災をきっかけに神戸ブランドの様相が大きく変わった。

その特徴を見てみよう。

1. 車は前後左右のいずれかの窓ガラスがなく、その代わりに透明ビニールをガムテープで貼りつけている。又は、ボディが大きくへこんでいる。
2. 街ゆく人は必ずマスクをかけ、リュックを背負い、ヒダの無いズボンにズック。手には地図を持っていなければならない。
3. 通学の児童はヘルメット着用。
4. 家は“カセツ”ならなお一層ハクがつく。

一回入るだけでタオルが茶色になる。ヘンな理屈をこねまわし、無理やり入れようとするが、実のところ気にはなっていた。ドラム缶のフロに入つてると言うのと、周りが鉄やから熱いでしょうと必ず言われるが、そんな事はない。お湯の温度と同じ頃加減で家庭用のフロよりも気持ちよく、体の芯までぬくもり、額には玉の汗。

### ■よろこんで、行きますッ

「あなた、今夜はいいわね。ゆつくり風呂に入つて、布団に寝れて」

地震後約一ヶ月。会議に出席するため東京に出張することになった。

二十四時間、着の身着のままの車庫での生活から、一泊ではあるがやつと解放される。会議ではあるが、車庫での避難生活に疲れた今の私にとって、今回出張は神戸を離れさえすればどこでもいい。風呂に入れる、寝間着を着て布団に寝れる、足を伸ばせる。一晩休養することしか頭になかった。

新幹線で向かう時も、こんな超高速で走っていて震度七の地震がきたら大惨事やなあ、と考へたり、宿泊の高層ホテルを見上げ、もし大地震がきたらどうやって神戸での体験を生かし、生き延びることができかなどと、普段考へもしないことをつい考へてしまう。

東京の街を歩いていても、頭上に看板が突き出した雑居ビルの谷間にさしかかると、自分が通る道筋の両脇にあるビルを一個一個検証してしまう。このビルは簡単に崩れそうやから反対側ににげよう。まてよ、反対側のビルの上には看板がいっぱい突き出していて、絶対落ちてくる。かといって先に走つたら向こうのビルは全面ガラス張りやから俺の頭にはガラスの破片がいっぱい突き刺さつてま

うぞ。血だらけやな。

ベッドで横になりテレビを見ていても、このホテルが倒壊したら……と、つい考へる。死んだら終わりやけど、生きていたらどうやって脱出するか。カーテンやらベッドカ

バーやら細かく切り裂いて繋いだら下まで届くやろか。しもた、カッターを持て来ればよかった。

思いつきくつろぐつもりが……。





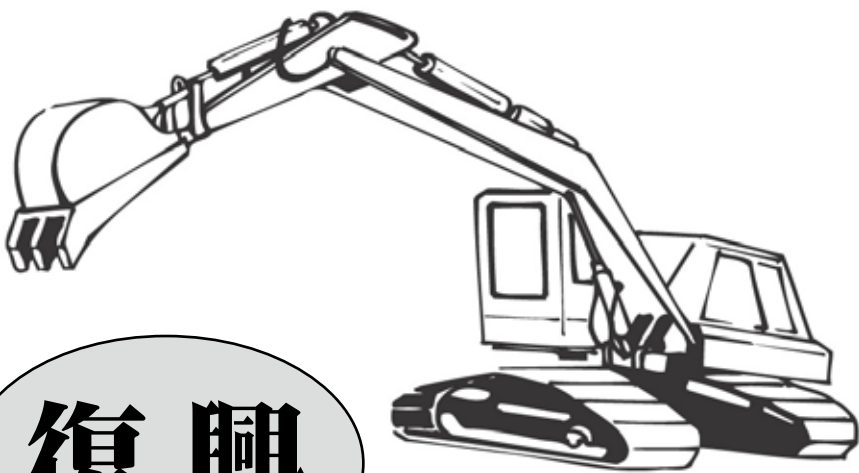
犠牲者よ安らかに

身延山唱題行脚隊、

神戸の街に響くお題目



四月二十四日と二十五日の両日、身延山行脚隊と地元・兵庫県東部青年会で編成された慰霊行脚隊が、三地区に分かれ、お題目の声高らかに、犠牲者慰霊唱題行脚を行った。



復興

力強くひびく復興の槌音

■復興に向けて

“がんばろうや神戸”のスローガンがいたる所に目に付く。行守寺とてまけてはいられない。これから復興に向けて力強く突き進んでいくつもりだが、目先の復興にばかりとらわれないようにしなければならぬ。お寺の復興という、つい本堂再建に目を向けてしまい勝ちだが、遠く行守寺百年の計を見据えて考えるならばこの機会に

千年万年もゆるぎない磐石を敷くことが大前提であると考え。檀信徒の皆さんには、誠に大変な中、お願いするのも胸を痛めますが、皆さんの永遠の安住の地を、神戸一のうらやましい場所にしましょうや、がんばって。  
「私の寺は行守寺です」と胸を張って自慢できる寺に。

南無妙法蓮華經



ワシらがやってます。

お寺はな、末代まで残るんやでエ。こんな所を造らせてもらう。ワシの仕事が末代まで残るんや、こんな冥利はないッ。誰が見ても絶対ケチのつけようがない仕事をします。まかせて下さい。よそからぎょうさん業者が来とるけど、地元のワシらが頑張らなどないすんねん、なあ田沼。  
「知らない人だから少し不安があったけど、あの人なら任せられそうね」  
「そうや、あの大將の心意気が気に入った」

井沼JV







↑全壊の法蓮寺本堂 ↓兵庫区の焼け野原



↑唯一生き残った通信回線のFAXを外に出して使う  
↓車庫を台所兼リビング、事務所に改造。



カメラ  
スケッチ



カメラ  
スケッチ



右上、遺体捜索の自衛隊  
右下、モトクロス自衛隊  
左上、全国の消防車  
左下、全国のパトカー



倒壊で1階が無くなった兵庫署



復旧作業中の住職



歴代の墓碑も全滅



# から編集室

◆無事脱出をはかり、ひんぱんに起こる余震に怯えながら、車の中で夜明けを待った。暗いことが不安をより一層増幅させる。

夜が明けた。

「子供達もよく聞け、これから家に入る。いちばん大事な物と取りあえず寒さをしのぐだけの服と毛布、家に入る前に自分の部屋のどこに何を置いているかよく考えて。時間は五分」

女房には何か食べ物も、と指示して、

「よし、行くぞー急げよ」

章子なんかは自分の部屋のあまりのひどい状況と恐怖で泣き出します。家中がメチャメチャで、私の事務所も文字どおり足の踏み場もなく、部屋中散乱しているフロップシーを

踏み歩くと、バリバリ音がする。悲しい音だった。

「おーい、みんな。大事なもん見つかったか？」

みんな両手に持てるだけ持つて玄関を出た。眼下に広がる神戸の街を見おろす余裕が、やっと出た。

「ワッッ！」と口に手を当て、絶句。

◆兄の家に預かってもらっていたパソコンを取り戻し、やっとこうして《山のたより臨時号》を発信することができた。震災疲れで眼帯している女房に、無理矢理入力させたお陰で、また悪化したようだ。

台所、リビング、事務所、会議室、編集室、なんでも兼用の仮設避難所はずぼらの私に



とって、居心地がいい。しかし、この鉄板の家で夏をどうやって乗り切るか、これが問題だ。

